



J Kを助けたら、
冤罪の片棒を担いで
痴漢の餌食にされた話

※サンプル

valencia

(※注意※ 体験版の為、途中部分からとなります。)

数日後、小石川は再び痴漢に遭った。

またか、と思い早目に逃げようとしたが、この日は自分よりも背が高い男に囲まれ、身動きがとれなかった。逃げるどころか、乗換駅でちゃんと下車出来るかすらも不安な状態だ。

尻をまさぐっていた手が前に回る。またベルトを外されてなるものかと思いい、押さえようとしたが、あろうことか腕を両側から掴まれて動きを封じら

れた。

あっさりベルトを外され、前からショーツの中に手を入れられる。

「やっ……」

小さく首を振ると、隣からクスクスと笑う声が聞こえた。

嫌な予感がして周囲を確認すると、自分を取り囲んでいた背が高い男達が、全員小石川を見ている。

「嘘……」

小石川は、自分が性質の悪いグループ犯罪に巻き込まれたと悟り、その手口から前回に続いて今回も、同じ連中に狙われたのだと気が付いた。

ペニスを刺激されて、小石川はじっと耐える。

続いて後ろからも手が入って来て臀部を撫でまわされたのちに、指先が肛門を素通りしてギクリとする。

「なるほどなあ……」

低い声が背後から聞こえ、おそらく男は先日と同じ人物だろうと察しが付

く。

そしてその声に小石川は、なんとなく聞き覚えがあると思ったが、誰なのかまではわからなかった。

男は指を動かして、小石川は自分の熱が上がってくる気がして俯く。くちゆくちゆと聞こえる水音。

それはあきらかに、小石川の女性側の性器から漏れていた。

「へへ……やらしいなあ。お兄ちゃんかと思えば、お姉ちゃんか」
前を触っていた男がいつのまにか手を奥へ進入させ、開き始めた割れ目に指先を侵入させてくる。

「い……やっ……」

大して反応しなかった男性器と違い、女の方は敏感だった。

複数の指先で中を擦られ、そのうちの一本がGスポットを当ててくる。

「洪水じゃねえか」

触れている男がニヤニヤと小石川を見下ろしながら、指の動きに速度を付

ける。

「や……ふ……んっ……」

あっという間に小石川は達してしまい、身体から力が抜け落ちる。

同じタイミングで後ろから、息を詰めたような男の声が聞こえ、気になったが、構わず小石川は背後の男へもたれ掛かるようにして、余韻に身体を震わせた。

「エロいな」

後ろから男の声が聞こえ、ショーツをずらされ下半身をむき出しにされた。

同時に濡れた感触が尻に触れ、そのままぬるりと秘部に届く。何度か擦り付けられ、開ききった場所へ入れてこようとしていた。

このままでは不味いと思い、いつのまにか解放されていた両腕を上げて、肘を張りながら抵抗する。

そのとき、車内アナウンスが聞こえて、電車が乗り換え駅に到着する。

男達は号令がかかったように小石川の身体を手放すと、降車する乗客の流

れに乗ってどこかへ消えた。

小石川も慌てて身繕いをしながら、トイレへ駆け込む。

気持ちが悪い身体を出来るだけで拭おうとしてスーツを脱ぎ、すぐに気が付いた。

ジャケットにべったりと汚れが付着している。

「なんだよ……これっ……！」

後ろから息を詰めたような声が聞こえていたことを思い出した。あの瞬間、背後で男が射精していたのだ。

小石川は人目も憚らずジャケットを流水で洗い、盛大に濡れたままのそれを手に抱えて会社へ向かう。

既に研修を一日休んでおり、これ以上の欠勤は困ると注意されている。

何より、他の優秀な二人と比べて、小石川は明らかに評価が悪い。

歯を食いしばって出社するよりほかはなかった。

翌日以降も乗車位置を変えながら出勤したが、すぐに痴漢グループに見つかつた。逃げてても、逃げてても、小石川は被害に遭い、電車で脱がされショーツを下ろされ、精液をかけられた。その手口は日に日にエスカレートした。

その日、小石川は居残りの補修で帰りが遅くなつていた。

車内は座れるほどではないものの、朝夕のラッシュに比べればかなり楽で小石川はすっかり油断していた。

疲れから立ちながらうとうとしていた小石川は、痴漢グループに取り囲まれ、手を出されてから気が付いた。

いきなり羽交い絞めにされ、スーツを脱がされる。

「やっ……ちよつと何っ……んむうっ」

口元を強い力で押さえつけられ、それ以上喋ることができない。

そのまま全裸にされたというのに、他の乗客は遠巻きに見ていて誰も助け

てくれる様子がない。

両脚を開かされ、腰を突きだすようなポーズをとらされる。

ダメだ……そう思った次の瞬間、背後から性器を挿入された……それは小石川の初体験であり処女喪失だった。

数回激しく擦り付けられたのちに、臀部へ精液をかけられる。

口元の掌は強く、声を封じられたまま、今度は別の男に挿入された。

その様子が撮影されていることに気が付いたのは、五人に輪姦されてからだった。

口を押えていた手が離れ、痛みと疲労から全裸のまま通路に寝転がった小

石川は、自分を見下ろしてニヤニヤと笑っている男達の顔を目に焼き付けた。

「こんなの犯罪じゃないか」

悔しさから思わずこぼれ出た言葉は声こそ掠れていたが、ちゃんと聞こえていたらしかった。

そして、予想だにしない返事を聞くことになる。

「否定はしない。だが、自分は無実だとも思っているのか」

冷たくそう言った男の声には聞き覚えがあった。

痴漢行為の際、常に小石川の背後に立っている男の声。

小石川はゆっくりと視線を動かし、今一度男の顔を確認した。

男はスマホをこちらへ向けており、おそらく一連の行為を撮影していたらしかった。

百八十センチ近い身長。スラリとした体格。オーダーメイドのスーツとお気に入りブランドのブリーフケースは身に付けていなかったが、その手首にはあのクロノグラフが巻かれていた。髪がボサボサで眼鏡をかけておらず無精髭を生やしていたが、小石川にはやっとわかった。

「あんた……まさか……」

「俺はお前によって、全てを失った男だ」